

デカルトにおける「感覚」の意味

久保田 進 一

1 議論の提示

デカルトが「学問において堅固で揺るぎのないもの⁽¹⁾」を見出すために、感覚を真理の認識手段にはなりえないとして、排除したのは確かである。しかし、デカルトが排除したのはどういう意味での感覚なのであろうか。というのも、感覚と一言で言っても、いくつかの段階の、あるいはいくつかの種類⁽²⁾の感覚をデカルトにおいては見ることができるからである。例えば、『省察』の「第一省察」においては次のようにデカルトは述べている。

「なるほど感覚は、何か微細なもの、きわめて遠くにあるものに関しては、ときとしてわれわれを誤らせることがある⁽²⁾」と。

また、「第二省察」においては、次のようにも述べている。

「最後に、この同じ私はまた、感覚するものでもある。いいかえると、物的なもの、感覚器官を介したもの (per sensus) として認めるものである。すなわち、いま私は光を見て、騒音を聞き、熱を感じる。これらは虚偽である、私は眠っているのだから、と言えるかもしれない。けれども私には、確かに見ると思われ、聞くと思われ、熱を感じると思われる (videre videor, audire, calescere) のである。これは虚偽ではありえない。これこそ本来 (proprie)、私において感覚する (sentire) とよばれるところのものである。そして、このように厳格に解するならば、これは、思惟する (cogitare) ことにほかならないのである⁽³⁾」と。

ここで、デカルトは同じ「感覚」という語を使っているが、一方では、「ときとしてわれわれを誤らせる」感覚と言っておきながら、他方では、「虚偽ではありえない」と言う。このことから、ここではデカルトは少なくとも二種類の感覚について述べている。つまり、一つは感覚器官を介したものとしての感覚であり、

もう一つはデカルトが「本来、私において感覚するとよばれるところのもの」としている感覚である。それでは、これらの感覚はどのように異なるのであろうか。また、デカルトが感覚を三つの段階に区別していることにも注目することができる。

そこで、本論文の目的は、デカルトにおける「感覚」ということには、どのようなものがあり、それらが何を意味しているのかを検討していこうと思う。つまり、この「感覚」という意味の相違は何であるのか、ということ进行明らかにしていくことである。そのことによって、デカルトが真理の認識手段から退けた感覚がどのような感覚であるのかが明確になるであろうし、逆に、認識手段として採用した知性がどのようなものであるのかが理解できるのである。

2 「ときとしてわれわれを誤らせる」感覚

2.1 知覚について（遠くの塔と近くの塔）

まず、「第一省察」において疑われている感覚から見てみよう。この感覚についてはデカルトは次のように述べている。

「これまでに私がこのうえなく真であると認めてきたすべてのものを、直接に感覚から (a sensibus) あるいは感覚器官を介して (per sensus), 私は受けとったのである。ところが、これら感覚がときとして誤るものであることを私は経験している⁽⁴⁾」と。

また、続けてデカルトは次のように言う。

「なるほど感覚は、何か微細なもの、きわめて遠くにあるものに関しては、ときとしてわれわれを誤らせることがある⁽⁵⁾」と。

つまり、ここで述べられている感覚は「ときとしてわれわれを誤らせる」感覚であるわけだから、当然、懐疑の対象になってくる感覚なのである。具体的に言えば、このことは「第六省察」で語られている次のことである。

「遠くからは丸いと思えた塔が近寄ってみると四角であるとわかったり、その塔の頂に据えられている巨大な彫像が、地上からながめるときほど大きく見えなかったりすることがしばしばあった⁽⁶⁾」と。

デカルトはこの距離に応じて、形が変わるものを知覚するという感覚を「ときとしてわれわれを誤らせる」と言う。このことは、我々の感覚器官に異常があることを言っているのではなく、正常であることが前提となっている。これは、通常の視覚の特徴である。もちろん、この場面では、どちらが真であるか偽であるかということを行っているわけではないし、当然、遠くで見たものが偽であり、近くで見たものが真であるということを行っているのではない。したがって、デカルトは感覚による認識が真であるか偽であるかを問うているのではなく、また、感覚を通して見える見え方を疑っているのでもない。いま見ているということに関しては、その見え方は疑う余地がないのである。つまり、いま、遠くから塔を見ていて丸く見えるという見え方そのものには疑っても仕方がないことであり、丸く見えるという事実があるだけである。しかし、塔を近くから見ると、丸ではなく、四角く見えるのである。遠くから見たときには丸く塔が見えたという事実と同様に近くから見たときの塔は四角く見えるというのは事実であり、そのことを疑うことはできないのである。したがって、どのような見え方が真であり偽であるかを問うているわけではなく、見ている見え方そのものを疑っているのでもない。

それでは、どうしてこの感覚による認識は疑わしいのであり、「ときとしてわれわれを誤らせる」感覚となるのであろうか。感覚による認識が疑わしいと思われるのは、感覚が我々に示す見え方が、距離に応じて、見る角度に応じて、時間に応じて、変化するからである。そのため、感覚を介して見える見え方はその時にはある決まった見え方を与えてくれたとしても、厳密に言えば、時間が経つにつれて、あるいは少しの動作によっても、いま見えている見え方はいままで見えていた見え方とは異なるものになる。同じ対象を見ているはずなのに、距離に応じて異なる像が現れるのである。見ている像そのものは疑うことはできないが、何らかの変化によって、見え方が異なり、見ている像は疑わしくなるのである。そして、デカルトはこの像の変化によって、見え方が異なることを「感覚はときとして誤るもの」・「我々を欺いたことのあるもの⁽⁷⁾」と称する。したがって、デカルトはこの種の感覚による見え方を真理の認識の基準から退けるのである。

2.2 「第二省察」における疑わしい感覚

次に、「第二省察」で述べられている疑わしい感覚について見てみよう。それは次の箇所である。

「物体的なものを、感覚器官を介したものとして認めるものである。すなわち、いま私は光を見て、騒音を聞き、熱を感じる。これらは虚偽である、私は眠っているのだから、と言えるかもしれない⁽⁸⁾と。

ここに述べられた感覚器官を介したものとしての感覚というのは、デカルトも例を挙げているように、「光を見て、騒音を聞き、熱を感じる」という感覚である。それは通常、我々が感覚と呼んでいるものでもある。これらの感覚はデカルトに言わせると、「これらは虚偽である、私は眠っているのだから、と言えるかもしれない」ということになる。そのため、懐疑の対象となる根拠を持っていると言える。もちろん、はっきりと「これらは虚偽である」とは言ってはいない。しかし、「虚偽である」という可能性もあり、逆に言えば、「これは虚偽ではありえない」とは言えないのであり、確実性を持つことはできないのである。さて、ここで注意しなければならないことは、感覚が誤ると言っても、「第一省察」における塔を見る場合の「ときとしてわれわれを誤らせる」ということと「第二省察」における「光を見て、騒音を聞き、熱を感じる」という感覚が「これらは虚偽である」ということには、違いがあるということである。つまり、前者が見ている像の変化による見え方を疑っているのに対して、後者は見ている像とともに見ているという働き・作用を疑っているのである。前者が疑われる時というのは、遠くで見る時と近くで見る時の違いに気づいた時である。後者が疑われる時というのは、「私は眠っているのだから、と言えるかもしれない」時である。デカルトは「第一省察」において、次のように言っている。

「これらのことをさらに注意深く考えてみると、覚醒と睡眠とを区別しうる確かなしるしがまったくないことがはっきり知られるので、私はすっかり驚いてしまい、もう少しで自分は夢を見ているのだ、と信じかねないほどなのである⁽⁹⁾と。

つまり、我々には覚醒か睡眠か、あるいは夢の中か現実の中かを決定するものが見あたらないのである。したがって、いくら、我々がリアルに「光を見て、騒音を聞き、熱を感じる」という感覚を持ったとしても、我々がいま夢の中にいる

のか、現実の中にいるのかはわからないのである。たとえ、我々が夢の中にいて、それらの感覚をリアルに感じていたとしても、夢の中にいるとしたら、全ては現実ではないと否定されなければならない。現実の世界ではなかったことを認めなくてはいけない。もちろん、夢であることに気づくのは眠りから覚めたときである。

「第一省察」で塔を見る場合、見ていることを疑っているのではない。疑っているのは、遠くで見た場合と近くで見た場合の塔の形が異なった形をしているということであり、「私」が見ている像の変化による塔の形なのである。他方、「第二省察」で光を見て、騒音を聞き、熱を感じるという場合、「見る」・「聞く」・「感じる」ということまでもが疑わしいことになる。それは、現実のことではなく、夢なのかもしれないからである。「見る」・「聞く」・「感じる」という感覚作用は、懐疑の対象になり得るのである。当然、それらによって得られる像、すなわち光、騒音、熱も疑わしくなる。現実には、光を見ていないし、騒音を聞いていないし、熱を感じているのでもなく、ただ眠っているだけなのかもしれないからである。つまり、像のみならず更に感覚作用についてまでも確実性を見出すことができないのである。

3 虚偽ではありえない感覚

3.1 本来的な「感覚する」という意味

さて、デカルトが「疑うことのできない」という感覚は、次の「第二省察」の箇所で見ることができる。上記の2.2で引用した続きの部分である。

「けれども私には、確かに見ると思われ、聞くと思われ、熱を感じると思われているのである。これは虚偽ではありえない。これこそ本来、私において感覚するとよばれるところのものである。そして、このように厳格に解するならば、これは、思惟することにはほかならないのである⁽¹⁰⁾」と。

ここでは、デカルトは「感覚する」ということは「思惟する」と言うことであり、そして、「この本来、私において感覚するとよばれるところのもの」については、「虚偽ではありえない」と言うのである。では、どの点において「虚偽で

はありえない」のであろうか。デカルトが例を挙げているところを見てみよう。

「私には確かに見ると思われ、聞くと思われ、熱を感じると思われているのである。これは虚偽ではありえない」と。

これらに共通している点は、「思われている (videor)」という点である。もちろん、その「思われている」ことの内容あるいは思惟内容すなわち「見る (videre)・「聞く (audire)・「熱を感じる (calescere)」ということは、感覚器官を介して得られる認識である。これらの思惟内容は、前述したように「虚偽である」可能性を持っている。しかし、その「思われている」という思惟作用は、「虚偽ではありえない」のである。「虚偽ではありえない」というのは、いささかの「虚偽もない」ということであり、「虚偽である」可能性が見出されないことである。「光を見て、騒音を聞き、熱を感じる」という感覚は夢の中にいたり、悪霊が出てくれば、それらによって、「虚偽である」可能性が出てくる。しかし、「私には見ると思われ、聞くと思われ、熱を感じると思われている」ことは、たとえ、夢の中でも、悪霊が出てきても「私に思われている」以上、「虚偽である」可能性は退けられるのである。

それでは、デカルトが言うこの「思われている」というのは、何であらうか。この「見る、聞く、感じると思われている」という思惟作用こそ、本来的に言えば、「感覚する」と呼ばれていることであり、厳密に言えば、それは「思惟すること」なのである。この「思惟する」ということは、何に対して「思惟する」ことをしているのであろうか。「私には見ると思われ、聞くと思われ、熱を感じると思われている」ということは、結局は、光を見ている「私」を思っているのであり、音を聞いている「私」を思っているのであり、熱を感じている「私」を思っていることなのである。つまり、感覚器官を介して様々な外界の刺激を受けて、何らかの対象を感覚している「私」を思っているのである。結局は、「思惟する」ことが向かっている対象というものは、「私」なのである。この「私」というものは、何を感覚していてもいいのであり、どんな行動をしていてもいいのである。したがって、ホッブズが反論⁽¹¹⁾で挙げたような「歩く」という身体的行為でも構わないのである。ただし、歩いていても、歩いている「私」に「思惟する」という思惟作用が向かっていなければ、「私」は出てこないし、「虚偽ではありえない」

ということも言えないのである。つまり、「歩く」という行為は懐疑の対象になるが、「歩く」と思うことは懐疑の対象にはなりえない。「思惟する」ことを懐疑の対象にすればするほど、その懐疑している「私」にその懐疑は向けられ、「私はある、私は実在する⁽¹²⁾」ということが「必然的に真である⁽¹³⁾」ということになるのである。

3.2 「思惟する」こと

デカルトは「けれども私には、確かに見ると思われ、聞くと思われ、熱を感じると思われているのである」と言う。そして、「これらは虚偽ではありえない」と言う。本来なら、デカルトにとっては、こちらが「感覚するとよばれるところのもの」なのである。それは、光を見ていることではなく、音を聞いていることではなく、熱を感じていることではなく、光を見ていると思っていることであり、音を聞いていると思っていることであり、熱を感じていると思っていることなのである。

ここに、デカルトの言う「感覚」の意味の多義性が見られるが、その後、「このように厳格に解するならば、これは、思惟することにほかならないのである」と言う。つまり、ここで、デカルトの言う本来の「感覚する」という意味は、「思っていること」すなわち「思惟」に置き換えられる。そして、「思惟」は、デカルトに言わせれば次のようになる。デカルトは「思惟する」ことについて、『哲学原理』の第1部9節で次のように述べている。

「私は、思惟という語で、われわれが意識しているときにわれわれのうちの生起するはたらきのすべて——ただし、そのはたらきの意識が、われわれのなかにあるかぎり——を意味する。したがって、理解すること、意志すること、想像することばかりでなく、感覚する (sentire) ことも、ここでは思惟する (cogitare) ことと同じである⁽¹⁴⁾」と。

ここで、デカルトは「思惟」という語をわれわれの意識に生じるあらゆる働きとしてみなすのである。その働きは、われわれのなかにもあり、更に言えば、各人のなかにあると言える。それは、「私」のなかにあることを意味する。それでは、「私」とは何であるのか。それについては、「第二省察」において二つの定義を見

出すことができる。それは、同時に「思惟するもの (res cogitans)」の定義としてみなすことができるだろう。

「私とは、厳密に言えば、思惟するもの (res cogitans) であり、言い換えれば、精神 (mens), あるいは心 (animus), あるいは知性 (intellectus), あるいは理性 (ratio) にほかならないのである」と。⁽¹⁵⁾

ここには、「思惟するもの」の規定がなされており、その主体が示されている。それらの主体がどのような働き・作用をするのかは示されていない。「思惟するもの」の働きが示されるのは、次の箇所である。

「しかし、それでは私とは何であるのか。思惟するもの (res cogitans) である。では、思惟するものとは何であるか。すなわち、疑い、理解し、肯定し、否定し、意志し、意志しない、なおまた、想像し、感覚するものである」⁽¹⁶⁾と。

ここに、デカルト的「思惟」の働きを見ることができる。この働きを見ると、デカルトが本来的に「感覚する」と言うときには、この「感覚する」とは「思惟する」ことであり、精神に属していることが理解できる。しかし、思惟がすべて「感覚する」ということではない。「感覚する」ことは「思惟する」ことの一つである。「思惟する」ことの中には、「感覚する」ことと同じように、「理解する」、「意志する」、「想像する」ことも含まれるからである。デカルトが「本来、私において感覚すると呼ばれるところのものとは、思惟することにほかならない」とした「感覚」は、「思惟する」ことの一つである。つまり、デカルトは「感覚」を思惟様態の一つと捉えているのである。そして、この「感覚する」ことを「思惟する」ことによって、はじめて、「私が感覚している」ことに気づくのである。この自己反省的な思惟作用は、言い換えれば、「意識」あるいは「意識する」⁽¹⁷⁾とすることになるであろう。そこに「私」が「私」を認識するという構造が生じ、「私」と言う存在が確立されてくるのである。デカルトに言わせると、感覚を介して得た像、さらには、その感覚作用までもが虚偽であるのかもしれないが、思惟作用は虚偽ではあり得ないのである。そこにコギトが見出されるのであり、確実なものとして、「私」の存在が現れてくるのである。

4 感覚の諸相

4.1 感覚の三段階

さて、デカルトが「感覚」について、詳しく述べているところが次の箇所でも見ることができる。それは、『省察』の「第六答弁」〈第九項〉である。そこでは、デカルトは「感覚」を「ほぼ三つの段階 (tres quasi gradus)」に区別している。その区別の仕方は次の通りである。

「第一の段階には、直接に身体的器官が外的な対象によって感触されるがためのもののみが属する⁽¹⁸⁾」と。

これは、あくまで身体的なものであり、精神が関わっていることはない。したがって、人間と動物に共通なものなのである。

「第二の段階は、直接に精神のうちに、この（第一段階で述べられていること）ように感触された身体的器官とそれが合一しているということによって、反響してくるすべてのものを含んでいて、例えば、痛み、擦ったさ、渇き、飢え、色、音、味、香り、熱さ、冷たさ、およびこれに類するもの⁽¹⁹⁾の知覚である」と。

第二の段階は「第六省察」で述べられる精神と身体が合一し、混合したことに起因する感覚なのである。そのため、精神が関わっていることは明らかであるし、合一しているということから身体も同様に関わらざるを得ないのである。

「最後に第三段階は、身体的器官の運動を機会として、われわれの外にある事物について幼少の頃からわれわれが行なう習慣のあった、すべての判断を包含している⁽²⁰⁾」と。

このことは、別の言葉で言えば、「われわれが子供の頃から馴れ親しんできた、それゆえ感覚と呼ばれているところの判断の仕方⁽²¹⁾」である。この段階は、感覚として取り上げられているが、「判断」ということから、実は知性に依存していることが理解できる。デカルトにおいては、事物を理解するのは、「私の精神のうちにある判断⁽²²⁾の能力によって理解している」からである。

以上のように、デカルトは「感覚」を三つの段階に区別している。しかし、この三つの区分は先に検討した「第一省察」における塔を見る場合と「第二省察」における「疑わしい感覚」と「本来、感覚すると呼ばれるもの」と関係するので

あろうか。私には三つの段階に分けた感覚と「第一省察」・「第二省察」におけるそれぞれの感覚とは、必ずしも一致した対応関係になっているとは思われない。つまり、感覚について異なった議論をしているのである。というのも、そもそも三つの段階に分けた感覚が登場してくるのは、「第六反論」〈第九項〉の疑問として反論者が「あなたは、感覚の働きには信を措くべきではないと言い、知性には、感覚の確実性よりもはるかに大きな確実性があると言っておいでになるからです。というのは、知性は、まずはじめに、よく按配された感覚から手に入れるのでなければ、そもそも、確実性をも享有することはないとするならば、一体、なぜそのようなことがありうるのでしょうか⁽²³⁾」と言う反論に対しての答弁によるものだからである。

ここで、反論者が述べている「感覚」は「知性」と対極にあり、確実性をもたない感覚についてのことである。このことからここで述べられている感覚は、「虚偽であるのかもしれない」という感覚のことであり、「本来、感覚すると呼ばれるところのもの」あるいは「思惟することにはかならない」と言われる感覚のことではないのである。デカルトの立場としては、「知性の確実性は感覚の確実性よりもはるかに大きい⁽²⁴⁾」と主張するわけだから、ここで三つの段階に分けた感覚は、「思惟すること」ではないし、知性や精神でもないのである。ただし、感覚の第二段階と第三段階においては、デカルトも述べているように、精神が関わってくるのは確かである。しかし、第二段階は「身体的器官とそれが合一しているということによって」成り立つ感覚であり、第三段階は「身体的器官の運動を機会として」成り立つ感覚である。これらをそのまま知性とみなす⁽²⁵⁾のは、ここでデカルトが述べている「感覚」の意味を正しく捉えていないことになる。

5 感覚の多義性（むすび）

さて、これまで見てきたようにデカルトが「感覚」について言うとき、様々な意味で使われていることがわかる。まず、「第一省察」（「第六省察」）と「第二省察」で述べられている「感覚」は、大きく分けると、二つに分けることができる。一つは、感覚器官を介して得られるものによる感覚である。これは、通常、私達

が感覚と呼んでいるものである。もう一つは、「本来、私において感覚する」と言う意味のものである。デカルトにおいては「思惟することにほかならない」というものである。

一方、感覚器官を介して得られる認識による感覚は、懐疑の対象になるものであり、確実性を持つことができない。そのため、真理の認識基準にはなりえないものである。さらに、この意味での感覚は、二つの疑われる側面を持っている。その一つの側面は感覚を介して得られている像である。これは、塔の例が示していることである。もう一つの側面は、「光を見て、騒音を聞き、熱を感じる」という感覚作用のことである。ここにも、確実性はなく、当然懐疑の対象にもなりうるものであり、その結果として、「虚偽である」のかもしれないということになる。単に見ている、聞いている、感じているということでは、「私」の存在、すなわちコギトを見出すことはできないのである。この感覚作用が疑わしいということから、その感覚を介して得られている像も疑わしいことになる。というのも、疑わしい作用から確実な像は見出すことはできないからである。私は眠っていて、光を見ている夢を見ている場合、「見ている」と言う感覚作用は虚偽であるし、見ている「光」の像も虚偽であるからである。

他方、デカルトが言う「本来、私において感覚する」とは、「厳格に解するならば、思惟することにほかならない」ということであり、「感覚する」は「思惟する」ことなのであり、思惟作用のことである。この思惟作用は、先に挙げた疑わしい感覚とは異なり、「虚偽ではありえない」のである。というのも、「思惟する」ことは「私」の存在に関わってくることであり、思惟している間は「私」の存在は確実であって、「虚偽である」ことはありえないからである。したがって、デカルトが本来的に「感覚する」と言うときには、感覚を介して得られる像でもなければ、感覚作用でもないのである。

また、「第六答弁」〈第九項〉において、デカルトは感覚を三つの段階に区別しているが、ここで、議論されている感覚は知性と対極にある感覚である。第一の段階の感覚は身体にのみ依存するが、第二の段階と第三の段階は精神と身体との二つが関わってくる段階である。しかし、専ら知性のみ、精神のみに関わってはいないのである。したがって、デカルトが言う「本来、私において感覚する」と

いう意味での感覚ではない。

以上のことによって、デカルトの「感覚」という概念は、一つの意味を持つものではなく、多義性を含んでいることが理解される。その多義性が何故生じるのかと言えば、デカルトは感覚という語を異なる次元で使っているからである。それらの次元を挙げてみるならば、像に関わる次元、「感覚している」と言う作用の次元、「感覚していると思っている」と言う作用の次元、または身体だけに関わる次元、身体と精神に関わる次元、精神だけに関わる次元が挙げられるだろう。

デカルトはこのように様々な次元で感覚について述べているが、デカルトの真意はどこにあったのであろうか。デカルトは、「感覚」という語を、それまで身体に関わる意味で使われていたのを、精神の側に持ってきたと言える。そのため、「本来、私において感覚する」とは、「厳格に解するならば、思惟することにほかならない」ということになる。つまり、「感覚」を思惟様態として扱うのであるから、身体に関わると言うよりもむしろ精神に関わると言えるのである。

最後に、付け加えることとして、そもそも感覚はそれほど明瞭に区別できるものなのであろうか。むしろ、デカルトは強引に区別してしまったのではないだろうか。それは、確実なものを見いだす為の懐疑を行うために、しなければならなかったものである。というのも、デカルトは「精神が脳と、脳のうちに生じる運動によって（精神がすぐに）感触されるというほど緊密に結合しているということに起因していますが、実際、正確に感覚を知性からわれわれが区別したいと思うとしたならば、（この運動以外の）他のものをも感覚へと関係づけるべきではないでしょう」と述べているからである。⁽²⁶⁾つまり、デカルトは感覚と知性をそれぞれ理解するために、緊密に結びついている精神と脳を引き離したのである。そういう意味では、コッティンガムの三元論⁽²⁷⁾は理解できるものなのである。しかし、デカルトが真理の認識の次元で観想をしているのなら、三元論として取り扱うのは、感覚についての誤った考察をすることになってしまう。というのも、デカルトが様々な次元で考察している感覚を精神と身体⁽²⁷⁾の合一と言うことで、一つに済ましてしまうからである。むしろ、様々な次元において感覚を考察することは、感覚の本質が何であるのかを提示させてくれるのであり、デカルトが辿り着いた地点は、本来、「感覚」は思惟様態として捉えるものなのである、ということである。

ある。

註

- (1) デカルトからの引用はすべてアダン・タヌリ版全集によるものとする。 *OEuvres de Descartes*, publiées par Charles Adam et Paul Tannery, Paris J.Vrin 1964-1975 これをAT. と略記し、その巻と頁をそれぞれローマ数字、アラビア数字で示す。
AT. VII. 17.
- (2) AT. VII. 18.
- (3) AT. VII. 29.
- (4) AT. VII. 18.
- (5) *Ibid.*
- (6) AT. VII. 76.
- (7) AT. VII. 18.
- (8) AT. VII. 29.
- (9) AT. VII. 19.
- (10) AT. VII. 29.
- (11) AT. VII. 172.
- (12) AT. VII. 25.
- (13) *Ibid.*
- (14) AT. VIII. 7.
- (15) AT. VII. 27.
- (16) AT. VII. 28.
- (17) 村上勝三『デカルト形而上学の成立』勁草書房 171-173頁。山田弘明『デカルト『省察』の研究』創文社 103-105頁及び112-113頁。
- (18) AT. VII. 436.
- (19) AT. VII. 437.
- (20) *Ibid.*
- (21) AT. VII. 439.
- (22) AT. VII. 32.
- (23) AT. VII. 418.
- (24) AT. VII. 438.

- (25) J.M.Beyssade, "L'analyse du morceau de cire," in *Sinnlichkeit und Verstand* p. 23. ベサードは、第三段階の感覚をそのまま知性とみなしており、それは真なる人間、蜜蠟そのものを措定する判断としている。
- (26) AT. VII. 437.
- (27) John Cottingham, "Cartesian Trialism," in *René Descartes Critical Assesments*, Vol. III, 1991. pp. 236-248. そもそもコッチィンガムが主張する三元論とは、本当に三元論なのであろうか。精神と身体の二元論とは、まさに二元論であるが、そこに精神と身体の一合一と言うことを持ってきて三元論になりうるのだろうか。精神と身体とは別の実体を持ち込むのなら、三元論ということも理解できるが、両者の混合を持ち込んでくるのは、二元論であることを主張していることと同じなのではないだろうか。このことに関しては、ここではふれない。

(くぼた しんいち 哲学)